公議所日誌 第一至六上

リ5
23
3

明治二年己巳四月

公議所日誌 第十一

寧
29
2

門 寧 5
號 23
卷 3

公議所日誌第十一

第六号外國商業規則案二條

第一

外國人ト商社ヲ結候儀差許候事

第二

商社取結差許候共右商業ニ付損失有之節政府ノ關係ハ無之事

右之通御規則相立候テハ如何

外國交際課

依田右衛門二郎

右評論鈔出

外國人ト商社ヲ結ブヽハ五害アリ彼富ミ我貧シク彼狡黠ニシテ我愚ナリ利ハ彼ニ歸シテ損ハ我ニ歸ス一ナリ期限ナド過チタルヽ彼レ我ガ人ヲ罵リ打擲スル一アリト聞クサル事アランニハ爭端ヲ啓クノ事アルベシ二ナリ商賈ハ理義ニ暗シ若シ彼ト内通シテ社ヲ結バヾ謀ヲ以テ我ガ社外ノ商人ヲ苦シムル事アルベシ三ナリ社ニ入ル者モシ逐電ナドスル一アラバ彼必ズ政府ニツキテ之ヲ求ムベシコレ關係無キノセシナシ四ナリ外國交際ノ道未ダ立タズ是等ノ弊法ヲ立ベカラザル五ナリ

同論ノ者

波多野治左門　北村經藏　小關與左門　荒井欽吾
太田省吾　戸田保　那須金右門　生田平格
高木大之進

過日議スル處ノ開鎖和戰ノ條決定ヲ俟テ行フモ遲カラズ

大略同論ノ者

加藤右門　磯部寛五郎　矢吹卯之二　松浦鶴治
熊谷貞藏　宇田節之助　四王天兵馬　錦織郎太夫
久松修理　野村倫右門　中里行藏　田邊確
松崎元右門　蜂屋　新　近藤門造
服部清三郎

先ヅ商人ニノミ差許サレ試ミテ後諸侯大夫ニ

及ブベシトワレモ開鎖ノ紛論居リ合ノ後ヲヨシ

大略同論ノ者

内田理兵衛　仙石左右兵衛　有馬峻太郎
三田稱平

條約ヲ改定シテ後商社等ノ事ヲ議スベシ

大略同論ノ者

佐原純吉　新宮左太夫　平井東馬　小泉重兵衛
近藤百助　中川潛叟　兩森謙三郎

交際ノ規則ヲ立テ後是等ノ事ニ及ブベシ　坂田　莠

大略同論ノ者

杉森六郎兵衛　岩田瀬左衛門　武田平之助　善野　司

三橋　肇　岡田　孝

大基礎確立ノ上御差許シ可然候

大略同論ノ者

冨松何左門　望月太兵衛　兒玉外記　岡田勘左門

青木定人　岩本範治　岩松傳藏　笠間英之進

白石左右衛門　佐藤　榮　大久保金吾　堀覺左門

國體ノ基礎立テ後議スベシ但シ國内ヲ域リ商社ヲ試ルハ可ナリ　赤見爲右門

根本未ダ舉ラザル者アリ商社等ノ末事ニ及ブ可ラズ　小柴　縝

糟屋權兵衛

商社ノ事甚不可ナリ且商業ニ付政府關係無シト雖モ我國人彼ガ為メニ恥辱ヲ得バ傍觀スルノ理アランヤ

下津權内

商社ノ事可ナリ然レトモ嚴ニ規則ヲ立姦計ヲ働ク者ハ屹度處置ニ可及旨兼テ達シ置クベシ且損失ニ付政府関係無之ト申譯ニハ難相成ト存候間前以良策ヲ建置ベシ

坂口音度

損失有之節政府關係無之ト定メバ交易ノ權下ニ移リ我ノ金銀等悉ク彼ノ有トナラン

中野重明

損失有之トモ政府関係ナシト云バ外國人恐クハ社ヲ結ブヲ欲セザラン故ニ損失等アラバ政府ニテ彼ノ全權役人ト談判ヲ遂グベシ且我國人ハ交易ニ馴レザル故商社ノ條約ヲ緻密ニスベシ然レトモ社ヲ結ブハ下民ノ申合セ故右ノ如クセズトモ議案通リニテ可ナラントナラバ異論

ナシ

我人民外夷ト社ヲ結ババ利益ヲ射ルノ情ヨリ
終ニ怨讟ヲ生ズベシ且損失ノ節政府関係セザ
ルヲ得シヤ

増田鋼太郎

此條御差許相成候ハバ別段ノ規則ヲ立ツベシ
且損失政府ニテ関係無キノ理ハアルマジ多分
ノ損失ハ政府ヘ届クベシ

大田原高

損失ノ事政府ニ関係セズト雖モ損失ニ付争端
等起ルニ至テハ全ク政府関係セザルヲ得ズ厳
密ノ規則ヲ定ムベシ

小原兵部

此議尤可然候然ルニ奸商利ヲ貪リ混乱ヲ生セ
シ時政府関係セザルヲ得ズ

松下右衛門

國情一定交際ノ道開クルヲ待テ行フベシ且社

加集寛介

ヲ結ブノ法ヲ立ルニハ政府関係ノ制度無ル可ラズ

福井大助

異論ナシト雖モ我ニ益ナク曲事ヲ生ズルニ至テハ國辱ヲ釀シ是非ナク政府ニテ関係スベシ故ニ我ニ不益ナラザル法ヲ定ムルノ上用ヒテ可ナリ

大略同論

麻見達左衛門

今數年延引ノ方可然且商社ノ儀ニ付自然外國人大損失等申立ルニ至レバ余儀ナク政府ニテ関係スベシ故ニ社ヲ結バザル方可然候

立花次郎左衛門

同論

鶴居彦左衛門

此法西洋ニ行フベクシテ我商民ニ行フ可ラズ

小林儀左衛門

生田小膳

我國ノ姦商不信ノ舉ヲナシ彼ノ損失ヲ累ル時ハ政府ノ關係ヲ免レザルベシ外國交際ノ要ハ信義ヲ確立スルニ在リ是等ノ小節目ニ在ラズ

瀧澤省吾

我商人出金ノ期限等ヲ失スルトキハ外國人必ズ償ヲ政府ニ請ニ至ラン豈關係無ト云ンヤ然レ𪜈闔國充實制馭ノ權我ニ備ルトキハ此法モ可也

樋口十郎左門

内外多事ノ折柄簡易ヲ以テ要トス商社ノ儀御許容無之方可然候

川西六三

我國ノ商人彼國人ニ不信アルトキハ必ズ彼ヨリ我ニ迫リ政府ニテ關係スルニ至ルベシ故ニ國内商賈ヲシテ社ヲ結ビ實地ニ試ミテ後外國人ト社ヲ結ブノ官許アルベシ

園田保

外國渡来ノ品一切官ヨリ買上ゲ然後商賈ニ令シ入札ニテ落スベシ且奇技淫巧ノ品ヲ載セ来

ルヲ禁シ若シ私ニ賣買スレバ嚴科ニ處スベシ
我國産ノ額ニ應ジ互市ノ額ヲ確定センヲ要ス
多ク國産ヲ渡スキハ日用ノ物價翔貴スベシ

同論ノ者　成田作右門
高橋和多留　早川與一郎

此法可ナリ唯商社全權ノ者公法ニ本キ法律ヲ
嚴ニスベシ商社ニテ翌年ノ物産等ヲ引當テニ
シテ金ヲ集ル等ノ法ハ官許ニ非レバ行レ難シ

故ニ官ニテモ夫レニ應ズル程ノ引當ナケレバ
之ヲ許サズ若故アツテ分散スルノ節ハ政府ニ
テ是ヲ償フ商社ノ通法ナリ是等ハ政府ニ關
係セザルベカラズ

同論　岡本直記

我國ノ商人ハ利ニ趨テ候故彼ニ押レ合意外ノ
奸ヲ生ゼンモ測リ難シ屹度嚴令ヲ示スベシ且

村田忠之丞

商社ノ事矢張外國掛リ管轄可然候

同論ノ者　塚本九一郎

冨永主馬　秋元慶之丞

異論ナシ以前長崎港ノ如ク取締被為立候上ニ

レヲ許スベシ　長崎鉛七郎

大略同論　軽部鷄彌

我國商人渡海ノ上實地經見ノ後ヲ期スベシ　有竹衛門

國内飛脚屋ヲ初メ其他問屋ト唱フル者抔各會

社ヲ結ビ候儀官ヨリ御世話アリテ後外國人ト

社ヲ結ブベシ　杉浦誠

時勢至當ナリ猶遺漏ヲ補フ左ノ如シ

商人共船艦買入并各國港々ヘ商店取開キ移

住等願ノ上ハ差許候事且商業ニ付テノ損失

ハ政府ニテ関ラズト雖モ其理非曲直ヲ裁ス
ル為メ各國同様各港ヘ其筋ノ役人ヲ置キ百
事為取扱候事

岡田雄次郎

此件御差許相成リ力ヲ合セテ商法ヲナサシメ
バ得ル所ノ利モ亦多クシテ商權專ラ外國人ノ
手ニ落ルノ患ナカラン

中金稱平

早々諸侯以下四民僧侶ニマデモ約ヲ定メテ一
株幾許ト云金員ヲ極メ東京大坂ノ兩府ニ於テ
大商社ヲ立ラレ追々小商社ヲ結ブ時ニ至リ其
小商社ヘ外國人ノ入社ヲ許スベシ尤大商社ハ
先ツ邦人而已ニテ結ビ最初ハ官ニテ管轄シ別
ニ判官事以下ノ諸員御撰用アリテ損得ハ官ニ
関係セザル等ノ規則ヲ立ベシ

櫻庭太次馬

従前開港ノ外貿易ヲ禁ジ物品ノ輸出入悉ク政
府ニ達シ有用産物無用翫物ト權衡宜ヲ得ベシ

且商社被差許候テモ商業損失ニ政府関係ナキハ勿論ナレ氏商法ノ曲直ヲ制セズンバ政府ノ累トナルベシ條約等精密ニ確定スベシ

羽室雷助

至急ノ要務ニ候自今外國ヘモ商會ヲ置キ盛ニ商業ヲ開クベシ冨國ノ基本ナリ第二條素ヨリ論ナシ

高柳安左門

同論

既ニ開港ト決セバ此法ヲ允許シ且國内商社船海通商ニ就テ船及荷物水夫等ノ請負法モ允許シテ並ヒ行フベシ商業ノ損失ニ就テハ政府関係ナキヿ勿論ナルベシ

福井謙藏

會社ヲ結候趣意規則等書取ヲ以テ雙方ヨリ政府ヘ爲願篤ト相調ベ規約嚴正ナレバ差許スベシ且規則違約コレ無ク商業上ノ損失ハ政府ニ

毛受將監

関係無ルベシ

九鬼求馬

御差許シ可然但シ政府損失ニ関係ナキハ勿論ナレ𪜈彼我ノ私曲ニヨリ損失セルハ固ヨリ保護セラルベキ儀ト奉存候

臼田東

交際ノ道宜キヲ得バ許スベシ政府損失ニ関係ナキハ至當ナレ𪜈大損失ニテ其身ノ進退ニモ係リ候節ハ彼ヨリ政府ニ訟ルニ至ラン故ニ先ヅ規則御一定彼我商人ヘ篤ト御ノ上許スベシ

永野壽郎兵衛

方今種々ノ事ニテ殆ド彼ノ汚辱ヲ受ルノ際商社ヲ許シ大損失アリテ之ヲ償フノ道ナクンバ其損失豈唯商人ノミニ止ランヤ

志賀律三郎

我ヨリ彼地ニ赴テ商社ヲ結ビ皇國ノ疲弊ヲ

補フノ謀ヲ興スベシ社中若シ争端ヲ起シ和親ヲ破ラバ果シテ許多ノ費ヲ生ゼン商業ノ損失ハ政府関係ナシト雖モ商人ノ損失ハ即チ皇國ノ疲弊ナレバ宜ク彼我ノ間互ニ蔑視スルヿヲ禁ズベシ

稲津　濟

二條共信義ヲ以テセザレバ　朝廷ノ患ヲ釀スベシ何トナレバ商業ノ權　朝廷ノ如ル処ナレバ訟訴等モ豈関係セザルヲ得ンヤ之ヲ行フ其

時ヲ得ザルニ似タリ

此事御許ニ相成レバ姦商私曲ヲナシ遂ニ禍ヲ釀スニ至ラン

沈元興助

西洋各國唯利ヲ是計ル宜ク嚴ニ規則ヲ立ツベキカ但シ和親ノ爲メ結バズシテ叶ハザルナラバ格別然ラザレバ今暫ク見合スベシ

和田理兵衛

佐々木錺藏門

國人外人ト商社ヲ立懇親ヲ結ビ取引勝手次第ニテ諸貨ノ貢數モ累大ニ至リ奸商其機ニ乘ジテ詐詭ノ術ヲ施サン商社ノ義假令御國益相成候トモ決テ許スベカラズ

中澤見作

彼國ヘ領事官欽差ノ官員ヲ遣サレ我人民海外諸産物ノ多寡佳惡及ビ賈金ノ貴賤ヲ諳知スル上ナラデハ我商民損毛勝ニテ[illegible]國ノ財力ニモ響クベシ

商社ヲ結ヲ許スヨリハ文明國ノ如ク政府ニテ商業ノ憲律ヲ立物價ノ權下ニ有ラザラシムルヲ緊要トス

堺和錦藏

商業ノ權政府ニ在テ下民ニ落サズ皇國ノ害ヲ釀スノ弊ナケレバ可ナラン然レ𪜈物ニ先後アリ是等ハ先ズル所ニ非ズ第二條至當ノ儀ト奉存候

京僧彦助

貿易ノ法ヲ建ルハ有無相通ジ國家ヲ利スルノ
權常ニ官ニ握ルベシ一日モ胥吏商賈ニ假スベ
カラズ況ヤ今日多事ノ秋ニ於テヲヤ

日置熊次郎

異論ナシ然レ𪜈内國商人奸智ヲ逞スル者アリ
故ニ商社ヲ結ブニハ信ヲ失ザルヤウ致サヾル
時ハ　皇國ノ曲トナリ商社モ益ナキ儀ヲ熟テ
説喻スベシ

平山小太郎

我國内ノ人民ニテ商社ヲ結ビ彼ヲ制スル權ヲ
有ツハ大ニ可ナリ彼商人ト社ヲ結ブハ害アリ

成富新兵衛

萬國普通ノ貨幣出来スル迚ハ延引スベシ即今
彼我ノ國力不當故結局彼ニ制セラレテ衰弱ノ
一端トナルベシ

西村捨藏

政府商業損失ニ関係セザルハ至當ナリ但シ

黒石　涯

御國體立テ後タリトモ國内ヘ法令ヲ下シ又西洋各國ヘモ定約セザレバ難逃関係ノ患ヲ生ズルコトアラン

綾部誠一郎

既ニ御規則相立候交易商社ノ法ナレバ差許テ可ナリ西洋各國商社ノ體裁ナレバ時ニ臨デ不可ナリ第二條政府ニ損失関係セザルハ至當也

千野良之輔

同論

約束一タビ違ハヾ國内煩擾ヲ生ゼン政府ノ関係セザルヲ得ズ交際ノ大本立テ後チ其可ヲ見テ是ヲ許スベシ

森安七右門

確乎タル規則相立ザルトキハ災害ヲ招クノ媒妁トナランモ計リガタシ商社ハ見合セ可然

鈴木權作

我國海外各港ト相通ゼズ利權彼ニ歸シ遂ニ争

岡本治兵衛

端ヲ開カン

商社ノ儀不可然後来政府ヘ関係スルノ患ヲ生ゼン

津川矢柄

第一號　上裁

第一号自諸侯乃至上士本末處置法則案決議ノ通可然但列藩其圖籍奉納ノ儀ニ付尚追而御沙汰ノ筋可有之其レ迫ハ右法則ノ儀御沙汰ニ難被為及旨被　仰出候事

第二號　上裁

第二号御用金ヲ廢シ國債法可相用ノ建議可然候得共當時會計ノ基本取調中ニ付追而御沙汰可有之旨被　仰出候事

第三號　上裁

第三号里數改定ノ儀建議ノ通可然但シ此儀ハ尚細詳取調可申出旨民部官ヘ被　仰付候ニ付此段可相達旨被　仰出候事

四月　行政官

正誤

第八上七葉目中澤見作評論醫學科中本道學ト記セシハ本草学ノ誤リナリ

官版御用

御彫刻所　神田旅籠町一丁目　竹口瀧三郎

御書物所　本町四丁目　上州屋惣七

明治二年己巳五月

公議所日誌　第十二

公議所日誌第十二

御國體之儀ニ付問題四條

制度寮撰修　森金之丞

第一

方今我國體封建郡縣相半スル者ニ似タリ如此ニシテ將来ノ國是果シテ如何

第二

若シ之ヲ改メ一ニ歸セントセバ其制封建ニ歸

スベキカ將タ郡縣ニ歸スベキカ其理否得失果シテ如何

第三

若シ都テ之ヲ封建ニセバ之ヲ如何措置シテ人情時勢ニ適當スベキヤ

第四

若シ都テ之ヲ郡縣ニセバ之ヲ如何措置シテ人情時勢ニ適當スベキヤ

右問題ニ付五月四日衆議員反復詳論ノ上連名ニテ下文ノ議案ヲ差出ヲリ

御國制改正ノ議

第一

皇國一圓私有ノ地ヲ公收シ政令一ニ出ルヲ要ス

第二

大國ハ一府ヲ設ケ小國ハ近傍ノ國府ニテ管轄スベシ每府知府事一人ヲ置クベキ事

第三

大凡十万石ノ土地毎ニ十縣ヲ設ケ知縣事一人ヲ置キ其國府ニ属スベキ事

第四

親王ヲ皇族トシ公卿諸侯ヲ貴族トシ輦下ニ居住セシムル事

但シ萬石以上ノ藩臣モ貴族ト稱スベキ事

第五

中大夫以下諸藩士迮ヲ上士下士ト二等ニ定ムベキ事

第六

府縣ノ知事ハ當分ヲ限リ舊藩主并執政參政中ヨリ任ゼシムベキ事

第七

府縣判事ハ銓選ニテ任ゼシムベキ事

第八

親王以下臣士ヲ私畜スルヲ禁ジ從僕其分ニ應ジ人員ヲ定メ附属スベキ事

第九

是迄士列ニアリト雖ト士ト任ニ堪ヘザル者ハ其分ニ應ジ産業ノ手當ヲ賜リ農工商ニ歸スルヲ許スベキ事

第十

主上御歳資御定メノ事

第十一

皇族ノ俸禄ハ平均ニ定ムベキ事

第十二

貴族上士下士ノ俸禄ハ各五等ヅヽニ定ムベキ事

第十三

皇族以下ノ俸禄總テ廩米ヲ以テ下シ賜候事

第十四

職俸ハ別ニ金ヲ以テ定ムベキ事

第十五

寺社地ヲ廢シ金米ヲ以テ相當ニ下シ賜候事

第十六

兩京ノ衛兵府縣ノ常備兵ハ上士下士ヲシテ之事

ニ充シムベキ事

第十七

要港ヘ海軍局一ケ所ヅヽ設クベキ事

第十八

人才ヲ選シ海陸軍將ニ任ズベキ事

第十九

府縣毎ニ文武學校ヲ設クベキ事

第二十

府縣毎ニ衆議院ヲ設クベキ事

但シ右院中ニ於テ廣ク銓選法ヲ設クベキ事

第二十一

毎年諸道ヘ巡察使ヲ差遣スベキ事

右同議ノ者

加州　紀州　藝州　姫路　高松　前橋　大垣

郡山　大聖寺　守山　岡山　新田　膳所　唐津

廣嶋　新田　大溝　高岡　三根山　椎谷　柳生

高冨　岡部　高取　一ノ館　園部　山嵜　吉井

西大路　一ノ宮　大垣新田　松岡　犬山　三上
郡上　勢州亀山　昌平學校　舉母　播州赤穂
下妻　結城　山上

郡縣議

一大藩ヲ府中小藩ヲ縣ト改ムル事
一藩主即チ知事ニ任ズル事
一藩臣ハ朝臣トシ判事以下ノ諸官ニ任ズル事
但シ知事ノ私用ニモ假借シテ召仕フ事
一舊領地ハ從来ノ儘之ヲ預ケ知事初士庶ノ給

俸及ヒ兵賦諸費ニ供スル事
一右ノ知事ハ大故ナケレバ世襲ノ事
一中下大夫上士ハ采邑ハ之ヲ廩米ニ換ヘ東西
京ニ住居セシムル事
一社寺領其他土地人民ヲ有スルモノ皆廩米ニ
換ベキ事
但シ藩主ヲ改メテ知事ニ任ジ領知ヲ支配
ニ改ムル事
右　三田

右同議ノ者

駿州　越前　雲州　彦根　明石　高田　福山
佐倉　淀　苗木　足守　烏山　綾部　小見川
小倉新田　大洲　母里　笹山　糸魚川　田ノ口
大野　芝村　成羽　伯太　田原　黒川　延岡
上田　安中　高遠　鯖江　林田　長南　豊岡
岡山新田　津和野　西端　庭瀬　神戸　淺尾
飯野　房州勝山　廣瀬　鳥羽　新見　小田原
萩野山中　峰山　高須　丸亀　新宮　宇和嶋
水口　矢嶋　新谷　佐野　福江　安志　嶋原
豫州吉田　丹州亀山

封建議

方今我國體所謂郡縣ノ如キ者相參ト雖モ大抵其制封建ニ近シ今一旦強テ之ヲ改メ一ニ歸セントセバ只人情ニ悖リ騷擾ヲ釀スノミナラズ廉耻ノ美俗ヲ毀リ躁進ノ惡弊ヲ生シ國脈ヲシテ衰弱セシムルニ至ラン人情時勢ニ適セズンバ

聖上　詔勅ノ旨ニ悖ラザル
朝廷ニ於テ大體
確立シ大權不移制度刑政必一ニ出シメバ旧貫
ニ仍ルト雖モ亦大害アルヿナシ今試ニ施行ノ
策ヲ陳スル左ノ如シ
一大小諸藩速ニ璽書ヲ賜ルベキ事
但シ漸ヲ以テ土地ノ有餘不足ヲ檢シ名實
適セシムルヲ要ス
一制度ハ一ニ　朝廷ニ體認シ一途ニ歸スベキ
事

但シ歳終ニ一歳ノ賞典刑政ヲ書シ　官ヘ
出シ死刑以上ハ　朝裁ヲ仰クベキ事
一朝覲會同ハ土地ノ遠近ニテ制度ヲ立行役時
ヲ踰シメザル事
但シ國役軍役軍資金等決シテ怠慢ス可ラ
ザル事
一近隣ノ府縣ト親睦シ緩急相救フベキ事
一各藩其經界ヲ正シ相侵スナク禮讓ヲ以テ相
親ムベキ事

一公卿徴士ノ類ハ関内侯トナシ土地ヲ與ヘズ歳俸ヲ賜ルベキ事

但シ従前ノ領地ハ据置事

一臨時ニ巡察使ヲ遣シ政刑ノ整否ヲ撿査スベキ事

一府藩縣ニ土地ノ星散スル者ハ漸ヲ以テ合一セシムベキ事

附録

一東西両京ヲ置キ畿内ノ制ヲ建ル事

西京ハ五畿東京ハ關八州ト定メ畿内ニ住スル諸侯ハ所在ノ散布スル官領ニ移封シ移封ノ費用三分ノ二ハ官ヨリ給シ年賦ニテ之ヲ上納セシム而文武ノ士ヲ諸藩ヨリ高ニ應ジテ貢出セシメ朝臣トナシ畿内ニ住セシメ親衛兵トナス中下大夫上士モ同ク畿内ニ住セシムベシ

一諸侯ノ封土ハ三十万石ニ限リ其餘地ハ子弟ニ分封スベキ事

但シ子弟ナキ者ハ其地ヲ官ニ預リ子弟アルヲ待テ之ヲ封ズルヲ許ス尤官ニ預リ中ハ其租税ハ官ニ納メ其政令ハ藩ニ委ス新田迄高等ノ規則モ同断

一子弟ノ分封ハ十万石ニ限ル事

右二條ノ如クシテ國家ニ大勲勞アル者ハ封土三十万石ニ充ル者凡百ノ器械金銀米等ニテ賞スベシ三十万石ニ充タザル者ハ三十万石ニ充ル迄ハ土地ヲ與ルモ妨ナシ

右

一奥羽ノ上地ヲ以テ有功ノ臣ヲ封スル事

一諸藩ヲ合シテ軍艦ヲ備ヘシムル事

右

一諸侯ノ封土ヲ撿シ名實相適セザル者ヲ減シ其削地人民ヲ以テ四方ニ節度府ヲ設ケ兵馬ヲ具ヘ藩縣ヲ牽制シ公卿ヲ以テ之ニ任ズル事

右

飫肥

富山

龍野

一畿内ヲ立ザレバ王室ノ諸用ニ乏シカルベシ故ニ諸藩ノ高ニ應ジ土地ヲ献ゼシメ海陸軍等ノ備ヲ設事

右　館山

一陸軍ハ各藩万石ニ五十人ノ定額ヲ立テ官兵ト名ケ各藩ニ豫備シ號令紀律一ニ朝廷ノ制度ヲ受ケ軍資ハ各藩ヨリ官ヘ貢出シ官ヨリ之ヲ給シ両京及ビ諸要地ノ戍兵等ニ備ル事

右　柳河

一藩主二十名ヅヽ石高ニ應ジ兵員ヲ率ヒテ年々両京ヘ更番スル事

右　福本

一万石以上ノ陪臣ヲ藩屏ニ任ズル事

一千石以上ノ陪臣ヲ中下大夫ト稱シ旧幕臣下ノ例ノ如クスル事

但シ是迄藩主與ヲル所ノ土地ヲ以テ朝臣タル事勿論ナリ藏米ノ者ハ土地ニ換ヘ藩臣

ハ九百石以下タルベシ旬服定テ悉ク土着
タルベキ事

右

右同議ノ者　　岸和田

宮津　鶴牧　鶴田　三州吉田　大田原　松山
飫肥　蔦野　岡　尼崎　岸和田　柳河　宇土
七日市　八戸　富山　田安　作州勝山　肥後
舘山　小野　岩村　堀江　九岡　三春　多古
柳本　麻生　高槻　伊勢崎　久留里　喜連川

岩槻　山家　櫻井　高蓙　村岡　福本　西條
小諸　古河　三草　足利　小濱　龍野

御國體封建議

第一

一我　神州ハ名義ヲ以テ立タル國ナレバ
皇紗連綿假令舜禹ノ如キ聖人出ルモ禪讓ノ事
アルヲ得ズ此名義ヲ以テ推ス時ハ諸侯ノ國ト
雖モ其理ハ一ニシテ累世君臣ノ義俄ニ廢ス可
ラズ是今日ノ勢風土人情ニ相適シ變ス可ラザ

ル事

第二

一方今封建郡縣相半スルニ似タリト雖モ只今ノ天下ハ純乎タル封建ナリ其郡縣ニ似タル者ハ即チ天子ノ公邑古所謂王畿千里ノ地四方ニ分在スルナリ今日ノ勢其地四方ニ分在スル妨ナシト雖モ太平無事ノ日ヲ待テ之ヲ古制ニ復シ五畿及ビ江丹播紀等ノ地ノ高ヲ量リ王畿ト定メ其地ニ所在ノ諸侯ヲ旧封ニ應ジテ僻遠ノ公邑ヲ分チ賜フベシ或ハ五畿ニ伊賀近江丹波若狭ヲ加ヘ九畿トナスモ可ナラン

第三

一封建ハ君臣世契上下相親ミ事アレバ死力ヲ盡ス其社稷ヲ守リ以テ皇室ノ藩屏トナル郡縣ノ民ノ其令吏ヲ視ル逆旅主人ノ如キ者ト不同事

第四

一我國四周大海外賊ノ来ル方所ナシ宜ク列侯ヲメ其藩屏ヲ嚴ニシ其侵入ヲ防ガシムベシ今其藩屏ヲ撤シ郡縣トナサバ其土ニ常君ナク其民常主ナク屯兵戍卒アリト雖モ禦侮ノ任ニ堪ザル事

第五

一方今諸侯封土奉還ノ願アリト雖モ提封旧ノ如ク更ニ御判物ヲ賜リ之レト始ヲ正フシ旧弊ヲ除キ庶政一新　詔旨ヲ體認シ　皇室ヲ翼戴セシメ毎年巡察使ヲ遣リ藩治ノ得失ヲ察シ慶讓ノ典ヲ行フベキ事

第六

一頻年兵禍連結シテ天下疲弊外患覬覦人心洶々此時ニ當テ國體ヲ變革スル決シテ宜シカラザル事

第七

一公卿ハ位有テ土地人民無シ故ニ入相出將ノ權輕シ天料僻遠ニ散處スルヲ以テ有功公卿ノ

第十二ニ充テバ諸侯ト維持シテ親疎間錯スルノ理ニ相適フ可キ事

第八

一東京ニ鎮將府ヲ置以テ東北諸侯ヲ撫御シ給フベキ事

第九

一奥州并ニ西州ニ鎮臺ヲ置キ宮及ビ公卿ニ其職ヲ任ジ皇化ヲ布キ鎮撫シ給フ可キ事

但シ府ノ兵衛ハ天下喪禄ノ士ヲ募リ府下近傍ニ於テ禄ニ代ユルノ田ヲ給シ耕稼シテ其力ニ食マシメバ兵ヲ農ニ寓スルノ意ニテ人々其上ヲ親ミ其家ヲ念ヒ驅テ死地ニ之カシムト雖モ叛カザルベシ

第十

一隣境諸侯ヨリ一兩人ヅヽヲ精撰シテ鎮府ニ貢セシメ以テ其國情ヲ達シ且府政ニ與カラシメバ海内一致ノ御政體相立可申事

右同議ノ者

中村　水戸　紀州田邉　麻田　壬生　三日市
太田備中守　西尾隱岐守　筑後　須坂　杵築
蓮池　生實　小城　完戸　沼田　吹上　岡崎
多度津　日出　黒石

國體論節略

方今天下ノ大勢ヲ論ズレバ天下ヲ三分ユシテ封建其二分ニ居リ天料其一分ナルベシ即チ天子畿内方千里ノ譯ナレヒ周家ノ制ナドニ比スレバ當ニ十倍ナルノミナラズ又要地ニ要地ハ大坂兵庫奈良堺新潟箱館ナドノ類諸侯ヲ置カザルハ即チ名山大澤ハ不以封ノ理ニシテ制度上ニ於テハ毫モ遺策アルヿナシ天下ノ治不治政事ノ舉息ハ其人存スルト亡スルトニ在ルヿニテ豈制度上ニ在シヤ所謂有治人無治法ナリ方今如何ナル時勢ゾヤ東陸兵革未息外弗覬覦旦夕將開禍釁人心洶々臨深履薄ノ思ヲナセリ此儘ニシテ安集撫綏スルモ尚恐ラクハ動乱騷擾セシヿヲ況ンヤ大制度ヲ大變革シテ以テ之レヲ攪キミダルニ於テヲヤ此

レ微臣等旧貫ニ仍ルヲ以テ是トスル所以ナリ
尤旧幕ノ流弊ト諸侯朝覲去留ノ制度ハ大變革
セザルヲヲ得ズ其規則ノ如キハ不贅於此矣
方今　朝廷多事微臣等銘々上リシ管窺ハ
冗長ニシテ恐ラクハ披閲ニ遑マナカラン
ヲヲ故ニ大意ヲ節略シテ以テ呈ス伏仰裁
正
石同議ノ者
今治　宇都宮　丹南　中津　土浦　久居　津
鴨方　福知山　出石　臼杵　久留里　新發田
平戸　秋月　秋田新田　尾州　川越　大田喜
持木　大村　長嶋　長尾　岡田　櫛良　新庄
忍　高瀬　高島　長瀞　本庄　守土　三日月
森　飯田　阿州
御國體議
方今ノ國體旧ヲ承テ封建郡縣相半ス爰ニ於テ
手諸侯又争テ其版籍ヲ返上スルニ至ル之レ封
建變シテ郡縣トナルベキ勢アルニ似タリ然リ

ト雖モ其實郡縣ハ行レ難カラン凡ソ封建ノ諸侯二百七十餘家皆土地人民ノ富アリ今ヤ之ヲ公ニ收メ又其藩士ヲ朝臣トナスモ數百年君臣ノ恩義固結シテ頗ル人心沸騰ノ患アリ故ニ今其版籍ヲ改メテ新タニ之ヲ本土ニ封ズベシ公卿モ亦百五十家ニ下ラズ徒ラニ位階ノ貴キノミニテ食邑ノ制モ未曾テ定ラズ自然公武ノ別アリテハ人心モ一和セズ故ニ親王公卿モ亦封土ヲ賜リ諸侯ト竝ビ立テ武備ヲ修メ王事ヲ勤メシムルニ如カズ隨テ從前ノ弊ヲ革メ凡百ノ制度典刑軍國ノ政ヨリ器械ノ製ニ至ルマデ遠邇同轍海内一家ノ如クスベシ然シテ大小侯伯藩屏ノ任ニ於テモシ失墜アル片ハ屹度嚴譴ニ處シテ可ナリ之レ封建ニ郡縣ノ意ヲ寓シテ内外彌堅固ナラン

右同議ノ者

筑前　栢原　三池　小幡　弘前　笠間

奉對御國體問題四條

第一

夫國体ハ萬世ヲ亘テ動スベカラザル者ナリ
天祖肇テ鴻基ヲ立テ王ヒシヨリ四海一紗
皇胤無窮其間乱臣大權ヲ攘ムヿ有ト雖モ肯テ
一人ノ　天位ヲ覬覦スル者ナク君臣ノ義確立
シテ今日ニ至レリ夫君臣ノ義ハ天地ノ大經人
倫ノ大本ニシテ苟モ義ノ在ル所死生ヲ不顧臣
子ノ分ヲ盡ス是所謂和魂ト稱スル者ニシテ即
チ守内萬國ニ冠絶スル所以ノ國体ナリ國体已

ニ立テ禮制始テ定リ政教即チ行ハレ人心方向
ヲ誤ラズ彼漢土ノ如キハ或ハ匹夫ヨリ起テ天
子タリ又西洋弗狄ニ至テハ庶人ノ才ヲ撰テ酋
長トシ又酋長ノ賢ヲ推テ天下ノ主トス嗚呼國
体ノ霄壤ナル識者ヲ不待シテ可知也今ヤ醜夷
日ニ迫リ蠻風月ニ行レ内賊未ダ平ガズ人各礼
ヲ制シ家自ラ俗ヲナス人心惑乱シテ適從スル
所ナシ今日大基礎ヲ立ツルヤ國體ヲ慮ラズ夷
狄ノ政教ヲ旨トセバ果シテ

天祖ノ遺意ナルカ抑亦萬姓悅服スルヲ封建郡縣ノ議今日ニ於ル其先後緩急果シテ如何

第二

天下ノ同ジク是トスル者之ヲ國是ト云フ而シテ其同ジク是トスル所ノ者ハ何ゾ國體ヲ重ジ大義ヲ明カニシ禮制ヲ嚴ニシ政教ヲ布キ東狄ニ心醉スルノ害ヲ除クハ所謂國是ニシテ人心ヲ一ニスル所以ナリ夫レ國是確定人心一和スルキハ器械ノ巧ヲ取リ舩艦ノ便ヲ用ユルモ尚之レ可ナリ苟モ國是定マラズ人心一ナラザレバ講和モ全スルヲ得ズ況ヤ戰ヲヤ苟モ人心和セザレバ封建モ治ム可ラズ況ヤ郡縣ヲ改メ制スルヲヤ今若シ二三要路ノ人已レガ好ム所ヲ以テ之ヲ名ヅケテ國是トシ重賞ヲ懸ケ嚴刑ヲ行ヒ億兆齊シカラザルノ口ヲ刼制セバ果シテ天下真ノ國是ト謂ベキカ如何

第三

古人云立大事者以正人心爲本ト然ラバ則上ナ

ル者人心ヲ正スヲ以テ政道ノ本トナシ下ナル者正心上ニ事ルヲ以テ生平ノ素志ト爲ハ万民心紆繫同一ニシテ義ヲ畢シ忠ヲ願フノ誠自ラ生セン果シテ然ラハ天下ノ事何ヲ爲シテ成ラザラン況ヤ制度ノ變革ヲヤ所謂政事ノ大基礎万世ノ國是ナル者上下一致正心以テ皇基ヲ護ルニアラズヤ否ヤ

第四

王化未洽外夷頻ニ覬覦シ内國未ダ寧静ナラズシテ天下ノ人民生ヲ聊ゼザレバ封建ノ制度ヲ變革スル今日ノ理勢決シテ行フ可ラズ前件論ズル所ノ如ク皇國永世不拔ノ大基礎確定ノ後事理ヲ明察シ大勢ヲ洞見シテ而後徐々ト之ヲ議シテ可ナランカ

右同議ノ者

人吉　松本　一橋　秋田　敷賀　黒羽根

松代

此其大略ナリ其他ハ省テ載録セズ

官版御用

御彫刻所　神田旅籠町一丁目　竹口瀧三郎

御書物所　本町四丁目　上州屋惣七

明治二年己巳五月

公議所日誌　第十三

公議所日誌第十三

五月七日會議ニ付例刻議長大原少將當分副議長神田孝平議員二百四人參聽ノ諸侯諏訪伊勢守稲葉備後守伊東左京大夫櫻井遠江守稲垣對馬守本多主膳正并ニ諸藩參聽人例席ヘ出仕議員例刻ヨリ第六号外國商業規則案ノ可否ヲ決シ後ニ第七号民間所持船規則案ノ評論ヲ讀上ゲ且論ジ了テ今日配分ノ議案ヲ請取一同退散

ス

第六号外國商業規則案可否決定ノ藩々

可トスル者三十九人

守山　膳所　飯野　肥前　矢嶋　佐野　郡上
三上　加州　大垣新田　大垣　神戸　佐土原
椎谷　志筑　狭山　田原　柳本　尼崎　松代
小濵　母里　高冨　長尾　伊勢崎　廣嶋新田
紀州　烏山　駿州　高取　山上　田沼玄蕃頭
新發田　敦賀　新見　綾部　高遠　古河

苗木

否トスル者百四十二人

丸亀　水戸　三州吉田　久留米　下舘　小幡
三日月　足利　森　宇都宮　佐伯　丹州峰山
岩槻　高槻　丸岡　三草　蓮池　安中　新宮
足守　宇和島　開成學校　中津　村岡　鹿島
西大平　八戸　秋田新田　鴨方　姫路　鯖江
荻野山中　西尾隱岐守　大田原　新谷　大洲
三日市　園部　府内　豊岡　杵築　熊本新田

小城　七日市　久留里　小見川　笠間　尾州
安志　山崎　延岡　高岡　一ノ宮　完戸　上田
豫州吉田　龍岡　昌平學校　岡田　丹州亀山
伯太　櫛良　舉母　前橋　麻田　中村　人吉
飫肥　雲州　明石　彦根　西端　出石　犬山
岡　平戸新田　山家　津　唐津　高松　宮津
西大路　喜連川　糸魚川　櫻井　廣瀬　高鍋
多古　濱田　松本　佐倉　淺尾　栢原　生實
庭瀬　福本　福山　秋月　鶴牧　結城　岩村

松山　福江　吹上　新庄　龍野　越前　土浦
小倉新田　紀州田邊　勢州亀山　須坂　柳河
笹山　芝村　壬生　井上河内守　林田　岡部
大田喜　作州勝山　堀江　高嶋　田安　水口
小田原　房州勝山　舘山　淀　福知山　薦野
沼田　麻生　久居　持木　太田備中守　日出
多度津　吉井　今治　黒石　丹南
可否相半スル者四人
柳生　小野　越後三根山　三田

無定見ノ者七人

川越　大村　宇土　一橋　飯田　三春　岸和田

因テ否ト決シ候事

第七号民間所持船規則案二條　外國交際課

第一

軍艦ノ外何船タリ𪜈庶人所持ノ儀差許候事

第二

右船政府御用之節ハ常變ニ拘ハラズ相當ノ賃錢ヲ給候事

右之通御規則相立候テハ如何

右評論鈔出

入江民部

右異論ナシ但シ平常御用ノ節ハ當人ノ閑忙ヲ糺シ御用仰セ付タルベシ非常至危ノ節ハ此例ニアラズ

岡田雄次郎

右至當ナリ但シ商法ハ機會ヲ愆ラズ時刻ヲモ爭フ者故商用等難去用向有之節強テ御借揚ニ

相成候得バ所持人難澁スベシ所持人差支ノ有無穿鑿ノ上借揚グベシ

分利廉平

大略同論

京僧彦助

右間然スルナシ彼國ノ船ハ風浪ヲ凌ギ其迅速ナルヿ我國ノ船ニ異リ今ヤ各國ト並立ノ際何船タリヒ所持ノ儀差許スベシ

山本昇之助

今ヤ風俗鄙薄專ラ利ヲ營ムノ折柄右御許シニテハ禍害ヲ生スルヿ必セリ多ク官船ヲ設ケ相當ノ賃錢ニテ庶民ニ借スニシカズ

坂口音度

右差許シテ可ナリ然レヒ商賈ハ唯利ヲ視テ國難ヲ計ラザル者アリ故ニ其制度ヲ立豫メ其害ヲ防グノ設有テ後許スベシ

雨森謙三郎

右至當ト云ベシ然レヒ一艘ヲ買毎ニ必官許ヲ

得ルニ非レバ私ニ外國人ヨリ買得ルヲ許サズ
既ニ買得レバ其府藩縣ヨリ印鑑ヲ給シ輸送碇
泊ノ日ニ至テ各港ニテ給スル所ノ印鑑ヲ照シ
以テ其何ノ府藩縣ノ船艦タルヲ證トナシ百事
裁判ヲモフベシ且此議既ニ立バ國役高割ノ法
ヲ以テ軍艦ヲ置キ海軍ノ用ニ供スルヿヲ議ス
ベシ

新宮左太夫

同論

右尤可ナリ接海ノ國々ハ組合高役ヲ以テ蒸氣
艦ヲ製造シ常變ニ備フベシ

併和錦藏

洋法ニ倣ヒ沿海ノ府藩縣凡高十万石ニハ必ズ
一軍艦ヲ製造シ小藩ニ至テハカヲ併セ製造シ
商船等ハ富商豪農ニ命ジテ製造購求セシムベシ

池田勣一郎

右異存ナシ尤蒸氣帆前船名間數等兼テ御役筋

持永治兵衛

ヘ届置候規則相成候方然ルベシ

矢田武左門

右極テ便利ナリ然レ𪜈毎々御借上ニ相成候得バ船ヲ所持スル者自然減ズベシ故ニ變事ハ格別平常ハ御借上無キ事ヲ布告セバ此事行ルベシ

平山小太郎

右異論ナシ規則相立上ハ納税ノ法モ設クベシ

中野重明

庶人所持ノ船納税ノ上ナレバ御用ノ節常變ニ拘ラズ相當ノ賃錢ヲ給スベシモシ税銀無レバ一ケ年何程トイフ御用船ヲ勤メシメ其數ニ越ユル上ハ相當ノ賃錢ヲ給フベシ

糟屋權兵衛

右至當ナリ然レ𪜈豪農富商大艦ヲ所持シ外國等ヘ航海シ私ニ交易ヲナスキハ我國ノ品多ク外國ヘ渡リ有限ノ品ヲ以テ無限ノ品ニ換ヘ後代ノ患ヲナサン是等ハ善ク制度ヲ立ツベシ

永野壽郎兵衛

同論

右至當ナリ速ニ造船ノ局ヲ設ケ西洋ヨリ船工ヲ召シテ其造法ヲ傳習シ幾多ノ軍艦ヲ造出スベシ

大久保金吾

右公私両便富國ノ端ナリ併シ豫メ姦商密賣等ノ弊ヲ制止スルノ法アリテ可ナリ

岡本治兵衛

富永主馬

右至當ナリ御用御借上ノ節ハ商人共相互ノ雇賃錢同様ニ給ルベシ

小久江權右門

右御許シノ上ハ巨商ハ勿論小商ニ至ル迄モ船社ヲ立所持仕候様アリタシ且雇賃錢ハ豫メ定價ヲ布令シテ可ナランカ

輕部鷁彌

右免許アルベシ但シ妄ニ繫置ヲ許サズ官貞居住ノ大港ニ繫ガセ出入共ニ之ヲ糺シテ商法ヲ

守ラシムベシ

右至當ナリ其船号大小善惡持主ノ姓名等迄明細ニ府藩縣ノ帳面ニ記シ置ベシ　村田忠之丞

運送等ニ外國船ヲ雇ハズ國内ニテ辨ジ候御趣向相立候ヘバ賃錢彼ニ奪ハレズ我ニ益アリ此法早々設クベシ　熊谷貞藏

高木東一

大畧同論

右御許シニ候ヘバ當正月諸藩外國ヨリ船艦買入ノ御規則御布告ノ如クナルベシ　岩田瀨左衛門

右御許シ可然但シ御借上ノ節常ニハ相當ノ賃錢ヲ給ヒ變ニハ其儀ナク船役ニ出サセ船頭水主ハ浦役トシテ船ニ差添出サスベシ尤粮米等ハ給スベシ　野々村倫右衛門

右至當ナリ尤古来ノ海上運輸船ハ向後新製ノ事ヲ禁ジ蒸氣船スクーテル等ヲ製シ候様商社法ヲ設ケ政府ニテ御世話有之度候

綾部誠一郎

同論

岡田勘右衛門

庶人ニ船艦ヲ許スノ儀方今ニ在テハ其害計ル可ラズ交際ノ道ヲ確定シ互市ノ權官府ニ歸スル後許スベキノミ且政府固ヨリ船艦ノ備無ル可ラズ堂々政府何ゾ庶人ニ求ムルヿヲセンヤ

小林儀左衛門

右冨國ノ一端ナリ併大船ハ容易ニ所有シ難シ故ニ望ノ者ヘハ足金ヲ貸下相成リ不日ニ數艘出来不虞ノ備ニナスベシ且本國ニテ運漕船出来外國人ニ利ヲ占セラルヽノ事ナキヲ要ス

小泉重兵衛

右異論ナシ但シ何品積入何方ヘ出帆ト申儀許

中里行蔵

出改ヲ受ケ歸帆ノ節モ訴出候様規則ヲ立ベシ

京極常樹

右至當ナリ併船主緊要ノ事有之節強テ御用ニ相成テハ難澁ニ付御用捨願出候ハヾ其情實ヲ聞届クベシ且賃錢ハ雜費御償ノ上船主ヘ利得有之候様致度候

立花次郎左衛門

右至當ナリ勿論一艘ニ付何程カ薄運上アルベシ且右船御用ノ儀ハ順序ヲ立置キ一ツ船ヘ幾度モ御用重ナラザル様有之度候

清水源次郎

同論

清水八右衛門

右御許シ可然但シ非常御用ノ節ハ別段船ノ賃錢ヲ給フニ及ブマジ唯揖取船人ノ雇錢計リ下シ置カルベシ

伴勘九郎

右至當ナリ但シ船税アツテ賃錢ヲ給フイ勿論

ナリ若シ無税ナレバ變有ルトキハ賜ハザルモ可ナリ　近藤幸止

右間然ナシ官ヘ相届ケ聞濟ノ上右船所持可仕ノ規則ヲ立ツベシ　榊原專蔵

同論　岡野小平治

右至急ノ要務ナリ我國従来船艦ニ乏シ故ニ坐シテ交易ヲナスノミニテ彼ニ制セラルヽヲ免レズ故ニ商船ノミナラズ假令軍艦ト雖モ許サルベシ　川西六三

本文軍艦ノ外ト云フ四字ヲ削リ廣ク何船タリトモ所持スルヿヲ官許シ五百石以上ハ官許ノ焼印ヲ受ケ百石以上ハ船税ヲ貢收スベシ尤官許ノ焼印無キ者ハ嚴禁タルベシ且官ニテ右船等雇フキ船艦破損スレバ相當ノ修理料ヲ給ハルベキ事

同論

成田作右衛門

右至當ナリ但シ外國ヘ航海ハ暫ク時ヲ待ベシ

赤見為右衛門

右適當ナリ但シ航海貿易等ニ至テハ政府ニテ管轄シ嚴ニ規律ヲ設ノベシ

服部清三郎

右當然ナリ御國體御一定ノ後地方三官割合ヲ以軍艦製造各海軍ヲ講練シ旁ラ運輸ヲ便利ニナシ候様致度候

岩本範治

此典ヲ活用センニハ天下ノ商賈ヲシテ國内商社ノ法ヲ設ケシメ船舶ヲ調ヘ航海術ヲ開キ候様御世話有リタシ但シ軍艦モ商船ニ用ヒテ苦カラザル御規則ニテ商賈軍艦ヲ購フノ力アラハ購ハシムベシ且政府御用ハ無論諸侯モ亦雇ヒテ不苦其雇賃ハ政府ヨリ庶人ニ至ル迄同一ニ

友松勘之丞

有之度但事變ノ節ハ格別ナリ

伊達五郎

同論

成富新兵衛

右方今ノ急務ナリ豪商巨賈ニ命ジテ火船ヲ整ヘテ之ヲ用ヒシメ外國船ヲ雇ヒ利ヲ奪ハルヽノ憂無ラシムベシ

佐木鋏右衛門

同論

右固ヨリ可トス然レドモ商社ノ法ヲ定メ良粹ノ貨幣ヲ製シ衛護ノ兵艦ヲ備ヘ航海ノ術ニ熟セシメテ後可ナリ且火輪飛脚船ハ尤急務ナリ速ニ此船ヲ設ケ我人民ヲシテ之ヲナサシメ外國ニ雇用スル勿レ

岩崎豐太夫

善野司

右國益ナルベシ然レドモ奸商官人ト偽リ彼ト商社ヲ結ビ天主教ニ惑溺スルヲ防グノ術無ル

ベカラス且政府ニテ常ニ用ユベキ目的アラバ別ニ製造スベシ何ゾ商人ニ借ラン非常ノ節借リ上ルヿ勿論ナリ豫メ是ノ令ヲ出スベカラズ故ニ此條ハ抹却シテ可ナリ

笠間英之進

右ハ商人共悦テ奉命可仕候尤二十人乃至三十人社ヲ結ビ之ヲ辨ジ候テモ可然之ヲ運漕ニ用ヒバ諸物價モ自然低下スベシ且以来外國飛脚船ヲ雇ヒ候儀被差留國内ノ船ヲ以テ往返イタシ度馬車モ同様ノ事右船ノ儀ハ外國ヨリ不買入自國ニテ製造仕度候

増田貢

右差許スベシ其土風ヲ察シ船額ヲ定メ有用ノ物ヲ外國ヘ開出スルヲ禁ジ大抵内地ヲ環航シ有無ヲ通ズルヲ要ス且之ヲ利用セシムルノ法ハ上ニテ綜括スベシ右舟沿海ニアレバ常變ニ供スル勿論ナリ御用ナキ時ハ相當ノ税ヲ收ムベシ

右ハ國本ト謂ヘシ并セテ軍艦ノ制ヲ許スモ亦可ナリ且諸侯伯ヘ命ジ軍荷ニ船ヲ論ゼズ其好ム處ヲ造ラシメン然レドモ諸藩ノ疲弊セル者ハ當分軍資金其餘ノ獻金ヲ免シテ其費用ニ供セシムベシ又農商ニモ軍荷ヲ擇バス所持ヲ許シ其軍艦ハ賃銀ヲ取テ政府并諸藩ノ需ニ應ジ其荷船ハ萬國ニ往来シテ匹儔ノ商法ヲ結ベシ

戸塚左近右衛門

帆足龍吉

右ノ規則速ニ設クベシ以来邦製ノ舟ハ五百石以上ノ新造ヲ禁ゼバ堅牢ノ巨船年ヲ逐テ出来セン然レドモ船ヲ造ル毎ニ外國ニ購テハ財貨漏泄セルノミナラズ欺レテ廢船ヲ買等ノ患モアレバ横須賀製錢所ヲ償ヒ還シ外國匠工ト我國匠工ト共ニ役ヲ執リ造船ノ功ヲ興スベシ或ハ器械ニ志アル者ヲ撰ビテ匠工數十人ヲ屬シ外國ニ遣テ製船ノ術ヲ學バシムベシ

長崎鉛七郎

同論　中澤見作

庶人洋形ノ堅船ヲ所持スルヲ御差許而已ニ已レナク船持會社ヲ建テ財力薄キ商民ハ船一隻ヲ數名ニテ所持スル様御世話アリタシ

同論　大津武郎

同論　岡田又吉太郎

右間然ナシ但航海學校ヲ御建設相成民庶ヲシテ運用測量器械發砲ノ技ニ熟セシムルヲ要ス且現今航海會社ヲ被建商人ノ願ニ依リ朝士諸藩士ノ内其業ニ精キ者御貸與ヘ相成度候

高柳安左衛門

今井金平

同論　園田保

皇國ハ禮義ヲ以テ人心ヲ維持シ外洋諸國ト異

ナリ併シ方今ノ有サマニテハ賃錢ヲ給フ當然ナルベシ苟モ真ノ一新真ノ王政ヲ行フノ日ニ至テハ賃錢ヲ給フ國家ノ規則トスルニ足ラズ庶人船ヲ勝手ニ所持スルヿ旧幕ノ末年此令アリト覺ユ又改テ令スルモ可ナリ

水野立三郎

同論

北村経蔵

同論

右時勢至當ニ候冀クハ税ヲ收ムルノ小利ヲ見ズ所持スル者多ク出来候様御處置アリタシ

河口市之進

民間ノ船ヲ國家ノ用ニ給セントセバ以来五六百石以上商船ノ新造ヲ止メ軍艦製ニ換ヘテ所持シ平ニハ賣事運漕ヲ專ラニセシメ其運上ヲ免シテ不虞ニ備フベシ

赤岸兵蔵

坂田　蓼

此法行ハル、時ハ大船ヲ儲ル者ニハ旗章船号ヲ官ヨリ賜ヒ船主ノ志ヲ鼓舞シ且点撿ノ便ヲ得ル一端トスベシ

但庶民軍艦求メ置度者ハ都合ニヨリ軍艦所持差許サレ時宜ニ依リ船将并ニ府藩縣ノ兵員等乗組セルモ海軍ヲ閑ク ノ一端ナリ且諸船ノ監察役ヲ置ク便ナリ

右ニ付テハ國内ニテ製造スル工夫ヲナスベシ外國ヨリ買入ルレハ失墜ナリ

同論　井上周蔵

外國製ノ船ヲ買入ル、ハ大金ユヘ政府ヘハ誰所持ト届ケ其實ハ數人ニテ催合モノモ有ン或ハ彼ト熟談ニテ價ノ三分一ヲ来歳ヘ延スノ類モアルベシ且買取タル費ヲ償ハザル内其船風損等アラバ自然殘金ノ遅滞ニ及ビ政府ノ関係ニ至ラン又航海ノ術未熟ニテハ害ヲ招クモ料

堀江覺右エ門

リガタシ宜ク撿査シテ後ニ許スベシ

法則取調ニ付入札ニテ五名ヲ撰舉ス

稲津　濟
服部清三郎
園田　保
坂田　莠
雨森謙三郎

官版御用

御彫刻所　神田旅籠町一丁目　竹口瀧三郎

御書物所　本町四丁目　上州屋惣七

明治二年己巳五月

公議所日誌　第十四上

公議所日誌第十四上

五月十二日會議ニ付例刻議長大原少將當分副議長神田孝平學校權判事仙石越前守同權判事心得豐岡前大藏卿議員二百四人參聽ノ諸侯板倉敎之助戶田長門守松平佐渡守松平主計頭生駒讃岐守京極備中守松平攝津守蒔田相模守米倉丹後守森川內膳正森對馬守關伊勢守稻垣對馬守并ニ諸藩參聽人例席ヘ出仕議員例刻ヨリ

民間所持船規則案ノ可否ヲ決定シ第十一字半ヨリ第八号外國人ニ被雇候者規則案ノ評論ヲ讀上ゲ且論ジ了テ今日配分ノ議案ヲ受取一同退散ス

第七号民間所持船規則案可否決定ノ藩々

可トスル者百九十一人

佐伯　秋田新田　松本　井上河内守　喜連川
津　笠間　尾州　嶋原　森　熊本新田　水戸
佐野　昌平學校　大聖寺　高鍋　芝村　廣瀬
勢州亀山　宮津　前橋　宇都宮　戸田大和守
鯖江　薦野　廣嶋新田　駿州　舉母　宇和嶋
麻田　山家　館林　一ノ宮　西尾隱岐守　高岡
豫州吉田　越前　櫻井　長尾　柳本　多度津
唐津　山嵜　栢原　母里　鶴牧　福山　結城
高富　長瀞　秋月　一橋　日出　吉井　峰山
田原　高遠　淺尾　松山　烏山　林田　宇土
黒石　大垣　椎谷　福江　吹上　新宮　加納
安志　佐倉　濱田　下妻　糸魚川　淀　筑前

三根山　高田　笹山　小幡　飯田　岡山新田
郡上　冨山　岡崎　鹿島　作州勝山　新發田
庭瀬　志筑　福本　村岡　中津　岩村　堀江
山上　三草　小田原　犬山　岡部　大垣新田
高取　平戸　古河　大洲　小倉新田　大田喜
延岡　三田　今尾　丹南　開成學校　三日月
足守　三春　豊岡　綾部　九亀　壬生　西端
伯太　今治　三州吉田　龍野　持木　七日市
丹州亀山　平戸新田　園部　加州　紀州田邊

生實　府内　杵築　守山　龍岡　小城　三上
尼崎　肥前　松代　膳所　矢島　高島　長島
常州府中　西大路　小濱　高槻　川越　出石
房州勝山　久留里　田安　久居　飯野　水口
八戸　岡　岸和田　肥後　岩槻　敦賀　館山
伊勢崎　福知山　小見川　沼田　柳河　明石
飫肥　雲州　紀州　中村　小野　人吉　新谷
高崎　狹山　荻野山中　津和野　鴨方　新庄
彦根　鳥羽　弘前　安中　上田　田沼　玄蕃頭

久留米　姫路

否トスル者五人

櫛良　大田原　土浦　足利　九岡

可否相雜ル者一人

須坂

因テ可ト決シ候事

第八号外國人ニ被雇候者規則案二條

第一

誰人ニ限ラズ官許ヲ不受外國人ニ雇ハレ候儀

可為嚴禁事

第二

外國ノ官職ヲ受ケ候儀官許ヲ受ザレバ嚴禁ノ事

右之通御規則相立候テハ如何

外國交際課

右評論鈔出

児玉　精

第一條彼ノ狡猾ニ惑ハザル様懇諭アリテ後官

許アルベシ

第二條何ゾ彼ノ官爵ヲ受ケ臣僕トナルノ理アラシヤ斷然嚴禁スベシ

加藤右門

第一條官許ヲ受ル者ハ假令下賤ト雖モ彼ニ雇ハレ候ハ我國命ヲ奉スルニ在テ彼ガ奴隷タラシメザルヲ要ス

第二條大略前同論

京僧彦助

第一條官許ヲ受ルニハ府藩縣宰主ノ免許ヲ受ケ然後國郡村邑ノ名宰主名主等ノ姓名迄詳記シ其上外國人ニ雇ハル、趣ヲ記載シ出願ノ上官許ヲ受ベシ且男子ニ不限女子モ同斷嚴禁ニ仕度候第二條大略前同論

宇田節之助

第一條宜シク其人ノ善否ト外國人ノ情實トヲ詳察シ且雇ハレ人進退ノ權專ラ我ニ歸セシムベシ

第二條大略前同論　生田郎兵衛

第一條彼ニ雇レ候者ハ男女ニ不限其本人ヨリ稅銀ヲ取ルノ法ヲ立テハ如何哉且我國情ヲ密告スル等ノ弊ヲ絶ツノ規則ヲ確定スベシ

第二條大略前同論　佐木鋳右エ門

第一條至當ナリ然レトモ假令豫メ官許ヲ請フトモ其戸籍分明ニシテ質朴正直ノ者ヲ撰デ之ヲ許スベシ

第二條大略前同論　菊花次郎左エ門

第一條願クハ官許ノ儀モ極メテ無ラシ事ヲ要ス

第二條大略前同論　雨森謙三郎

第一條外國人ニ雇ハルヽ者ハ官府其人ニ給マルニ印鑑ヲ以テシ其居地姓名年齡等ヲ記スベシ

第二條官職ヲ受ル等ノ儀ハ嚴禁ノ事

二條共ニ大略同論ノ者

藤田克之助　增田　貢　岡本治兵衛　近藤幸止

錦織四郎大夫

第一條允當ナリ但シ雇シ中ハ年限ヲ立テ可ナラン

第二條官職ヲ受ル等ノ儀ハ嚴禁ノ事

二條共ニ大略同論ノ者

平山小太郎　稲津　濟　飯田逸之助

第一條官ヨリ許スハ限月ヲ以テ許スベシ

第二條官職ヲ受ル等ハ嚴禁ノ事

新宮左太夫　三橋　肇

第一條外國人ニ雇レ奴隷トナル者四民ハ嚴禁シ穢多ヲ以テ之ニ許スベシ

第二條大略前同論

二條共大略同論

中川潛叟

第一條允當ナリ但シ士分以上外國人ニ雇ハル
ヽ儀豫メ禁令アルベシ　榊原專藏

第二條官職ヲ受ル等ノ儀ハ嚴禁ノ事　戸田保

第一條卑賤ノ者ハ格別雙刀ヲ帶シ候者ハ願出
候共容易ニ官許無之御内定ニ仕度候

第二條大略前同論　本多數馬

二條共大略同論　京極常樹

第一條御國民生産ノ道相立外國人ニ雇ハレ候
者抔無之樣仕度候

第二條官職ヲ受ル等嚴禁ノ事　下津權內

第一條我國人外國人ニ雇ハレ支那印度ノ轍ヲ
踏候テハ可憐ノ至リナリ斷然制止スベシ　小柴縝

右至當ナリ然レ𪜈條約ヲ新設セズンバ遂ニ行レ難カラン

成田作右衛門

第一條至當ナリ就中婦女子ニ至テハ尤嚴禁スベシ若シ出生ノ子アラバ官ヘ届ケ年限ヲ立テ本邦ニテ養育シ年限過レバ他邦ヘ轉住セシメ本邦ノ人種ヲシテ乱サシムル勿レ

入江事

右微賤ノ者ハ迷惑ノ次第モ有ルベシ且彼ヘ聞ヘテモ隔意ノ嫌アリ此規則不相立方カ

松下直衛

第一條最可然候教化ヲ厚フシ風俗ヲ正フシ聊ノ給料ニテモ皇國内ノ人民ニ仕ヘ外國人ノ奴タルヲ恥ト思ヒ人心ノ方向漸々改リ候様ノ御處置アリタシ

高木大之進

第一條至當ナリ自今彼ニ雇ハルヽ𪜈ハ官ニテ篤ト勘考ノ上雇ハル月數且免許ノ鑑札ヲ渡シ期月来

ラバ疾ク歸リテ良民タランヿヲ諭スベシ且
皇國ノ汙辱ニ成ル程ノ儀アラバ嚴科ニ處スベ
キ儀モ屹度申付誓狀ヲ取ルベシ
一妾ト乳母トハ年限ノ定メ無キモ有ルベシ誓
文狀ニハ及ブマジ只免許ノ鑑札ヲ與フベシ
一彼國ノ學術等稽古ノ為メ年期ヲ定メ其師ニ
寄ル者并ニ年季ニテ雇ハルヽ者ハ鑑札ヲ與ヘ
壹ケ年ニ一度返リ來リ改ムベシ
一第二條ハ御許シ無キ方可然候

第一條即今ハ先ヅ官ヘ請テ進退スルヿ御差許　那須金左門
相成追テ大基礎立テ後御法則相立候樣仕度候
尤婦女子異國人ノ妾ニ抱ラレ候儀ハ制禁仕度候
第二條藝術通達彼國ニ信用セラレ候者ハ年
限ヲ定メ御差許可然候　堀江覺左門
第二條官職ヲ受ルノ儀ハ彼政府ヨリ我政府ヘ
何某ヲ官ニ任ジ度旨賴入レ評決ノ上許諾シ名

指シノ者ヘモ心得達シ置キ彌官職ヲ受ル節尚
當人ヨリモ届ケサスベシ

井上周藏

右規則至當ト云フベシ然レ氏只一已ノ利ヲ貪
リ彼ノ奴隷トナル者有間敷トモ謂ガタシ若如
此者アラバ説諭ヲ加ヘ官許モコレナキ樣御處
置アリタシ

綾部誠一郎

第一條至當ナリ男女ニ限ラズ免許ノ印鑑ヲ渡
シ證印税ヲ貢收セシメテモ可ナラン且雇レ候
者過失アッテ償金等ノ事ニ及ンデモ政府ニ関
係セザルヲ要ス

野村倫右門

右ハ官許ナク只嚴禁可然カ

赤見爲右門

外國人既ニ國民ヲ雇ヒ候上ハソレ相應ノ官職
ヲ與ヘマジキヒ云難シ外國人ヘ談判ノ上嚴禁
ヲ立ベシ

此議案ニ改正ヲ加フル左ノ如シ

坂田 莠

第一

外國人ヨリ我官府ヘ請ヒ受ケ無之私ニ彼ノ雇トナル儀可爲嚴禁事

但シ何地ニテモ衣冠佩刀其他堅ク國体ヲ相守リ彼我ノ待遇内外ノ分別屹度不可亂事

第二

外國ノ官職ヲ受ル儀可為嚴禁事

第三

右ノ二則ヲ犯ス者ハ可處謀叛謂謀背國從偽之律事

田邊 確

第一條官許ヲ受シメンヨリ一切之ヲ禁ズルニ如カズ

第二條官職ヲ受ル事ハ千載不可有モノトス萬一如此ノ兆アレバ不得已規則ヲ立ツベシナレドモ如此ノ規則ヲ生ズルヿ義理ノ天下ニ明ナラザルニ出ル所ナリ

同論

恒岡完次郎
富田三藏

第一條異論ナシ然レ𪜈婦女子ニ至テハ官許ヲ請フモ許ス可ラズ

恩田啓吾

第二條官職ヲ受ルヲ嚴禁スルハ論ヲ待タズ官許モ義ニ因テ爲サヲ子バナラヌヿハ許スベシ

熊谷貞藏

庶人多クハ已ノ利ニ依テ御國辱ヲ不顧シテ爲ス者アリ猥リニ許ス可ラズ確乎掟相立候ヘバ豈屈辱シテ奴トナリ或ハ官職ヲ受可シヤ

岡田勘左門

大略同論

第一條官許ヲ經テ後雇ハルヽモ否ナラズ士分以上技藝ニ依テ師トナルハ格別雇ノ稱ハ禁ゼラルベシ

輕部鵠彌

第二條官職ヲ受ルハ臣下ニ的セリ汙辱コレヨリ大ナルナシ何ゾ官許ノ有無ヲ論ゼン　西村捨藏

大畧同論　増田鋼太郎

第一條是迄官許ナキ者モ以来取調ベ夷人ニ被雇候丈ハ官許ヲ受ケ然ル後雇ハレ候樣ニ規則相立度事　中野重明

第二條外國事務ニ關係スル小吏輩ハ彼ノ官職ヲ甘ジ受ケンモ計リ難シ此規則嚴ニ設ケザルヲ得ズ且自今外國人護衛ノ者ハ御國威ヲ落サザル意ヲ體スル人ヲ撰出アルカ又ハ之ヲ廢スルヿヲ談判スベシ　中里行藏

同論　鎌田平十郎

第一條官ノ公法ヲ以テ論ゼバ禁ゼズシテ舊ニ

仍ラザル能ハズ一人ノ私義ヲ以テ論ズレバ固ヨリ彼ノ雇役ヲ受難シ然ラバ之ヲ許スヿハ廉恥ノ風ヲ破リ之ヲ禁ズレバ交際ニ妨アリ故ニ不得已情狀ヨリ起リテ彼ノ雇傭ヲ受ル者ハ問ハズシテ可ナラン

第二條官職ヲ受ル者等ハ削籍シテ　皇國ノ民ニ非ザルヲ示スベシ

大畧同論ノ者

議部寛五郎　加藤勇雄　櫻庭太次馬

我國内ノ者廉恥ノ心アラバ豈外國ノ官職ヲ受ル者アランヤ況ンヤ官ヨリ許可スルノ理有ンヤ

園田保

水野立三郎

同論

第一條外國人吾男女ヲ雇ヒ小過アレバ之ヲ鞭ツヿ實ニ見ルニ忍ビズ故ニ其役負ヨリ其罪ヲ

中澤見作

懲シテ外國人自ラ手ヲ下スナキ條約アリタシ
且幼男女ヲ買却スルヲ禁ズベシ
第二條外國ノ官職ヲ受ルヲ官許スルハ甚不可
ナリ然レ𪜈交際上ヨリ不得已暫時彼ノ官職ヲ
受ルハ官許スベキカ然レ𪜈杜漸ノ法無ル可ラ
ズ故ニ衆心標準ノ規則ニハ立ツ可ラズ

依田君備門二郎

同論一

此外猶評論アリ下卷ニ出ス

本日箱詔ヲ閲覧ス

官版御用

御彫刻所　神田旅籠町一丁目　竹口瀧三郎

御書物所　本町四丁目　上州屋惣七

明治二年己巳五月

公議所日誌　第十卒

公議所日誌第十六上

昌平坂學問所

五月廿二日會議ニ付例刻ヨリ議長大原少將副議長神田孝平議員百九十九人參聽ノ諸侯加藤能登守山名因幡守平野遠江守其外諸藩參聽人例席ヘ出仕例刻ヨリ議員第九號并ニ第十一號議案ノ可否ヲ決定シ後ニ第十號ノ議案評論ヲ讀上ケ了テ今日配分ノ議案ヲ請取退散ス

第九號天主教ヲ毆ノ議案可否決定ノ藩々

天主教ヲ毆ヲ可トシ嚴刑ヲ用ルヲ可トスル者二十人

園部　阿州　太田備中守　村岡　秋月　丹南
高冨　林田　笠間　大垣　田原本　荻野山中
岸和田　長瀞　栢原　丹波龜山　八戸　杵築
西大路　尾州

天主教ヲ毆ヲ可トスル者二十四人

西條　明石　肥後　吹上　須坂　水口　吉井
高松　秋田新田　沼田　櫻井　小野　三日月
岩村　高田　舉母　黒川　持木　日出　大溝
熊本新田　川越　新庄　重原

嚴刑ヲ用ルヲ可トスル者二人

水戸　彦根

毆ヲ可トシ嚴刑ヲ用ルヲ否トスル者百六十四人

佐倉　房州勝山　烏山　壬生　久留里　岡部
高鍋　開成學校　長尾　守山　喜連川　下妻
土浦　小倉新田　今治　福本　七日市　下館
新見　高取　山家　志筑　福江　椎谷　小濱

松岡　淀　田安　加納　井上河内守　小田原
飯田　延岡　郡上　岡崎　飫肥　紀州　人吉
今尾　臼杵　岡　雲州　中村　館山　伊勢崎
唐津　山上　麻生　安志　常州府中　宇都宮
完戸　田沼玄蕃頭　飯山　三池　膳所　越前
黒羽　堀江　一ノ宮　多度津　峰山　昌平學校
佐野　丸岡　舘林　高嶋　小城　三春　中津
高岡　西尾隱岐守　小見川　津　笠山　宇土
大田喜　綾部　三田　新宮　西端　廣島新田

絲魚川　高槻　小幡　結城　櫛良　勢州龜山
新谷　足守　佐土原　柳河　丸龜　作州勝山
駿州　柳本　松本　平戸　田原　山崎　三上
三草　鯖江　肥前　狹山　森　弘前　新發田
宇和嶋　鶴牧　前橋　福知山　廣瀨　三日市
長嶋　大野　上田　高遠　松代　福山　龍岡
豐岡　出石　鹿嶋　生實　紀州田邊　大聖寺
矢嶋　佐賀　苗木　尼崎　久居　淺尾　宮津
鳥羽　古河　牛久　母里　佐伯　富山　大洲

岡田　鴨方　飯野　伯太　安中　小松　龍野
久留米　三州吉田　三根山　大垣新田　一橋
津和野　岩槻　豫州吉田　嶋原　濱田　麻田
敦賀　薦野　芝村　高崎　柳生
天主教ヲ敵ヲ否トシ嚴刑ヲ用ルヲ否トスル者一人
足利
嚴刑ヲ用ルヲ否トスル者一人
蓮池

依テ之ヲ敵ヲ可ト決シ嚴刑ヲ行フヲ否ト決シ候事

第十一　䭾火葬御廢止ノ議

下総國香取郡加藤淵村百姓　權之丞

井蛙管見ノ微事奉申上候今般　御維新復古養老ノ御仁政被　仰出頑愚私共迄難有奉存候夫レ孝ハ百行ノ源德ノ基愼終追遠モ孝ノ一事ト奉存候先朝

持紗天皇ノ御宇火葬初シヨリ以来親ノ身體髮

膚ヲ火灰シテ埋葬シ慟哭涕泣セズシテ却テ愉快葬送ノ禮ト心得　皇國ノ國體ニ背キ候弊風痛心歎息罷在候處今般　御維新ノ折柄忌諱ナク可申出旨被　仰出候ニ付不顧恐奉申上候田幕ノ政事ニテハ新ニ墳墓ヲ築事制禁ニ　御座候私共近邊村々墳墓ノ地狹迫ニテ民口次第ニ相增スニ至テハ遂ニ葬地モ無之人死スルトキハ無據身體髮膚ヲ火灰シ父祖々先骸骨有之候地ヲ再ビ掘發キテ其骨灰ノミ埋葬仕候且父祖死去シ數日ヲ經ズシテ又死去仕候者有之時ハ前ニ死セシ父祖ノ骸骨ヲ掘發キテ共ニ埋葬仕候是レ子タルノ道ニ相背キ痛心歎息罷在候得共墳墓狹小新築制禁ニ有之候間不得已困苦罷在候當今　更始ノ初天下火葬ヲ嚴禁シ土葬被仰出新ニ墳墓ヲ不毛ノ地ニ築キ候樣奉願候

右可否決定ノ藩々

右議案ハ評論ニ及バズ直ニ可否ヲ決スル者ナリ

可トスル者百九十人

肥後　平戸　新谷　三池　房州勝山　宇都宮

戸田大和守　黒羽　龍野　熊本新田　湯長谷
吹上　西大路　森　弘前　小濱　松岡　膳所
淀　井上河内守　延岡　飯田　肥前　三日月
狹山　古河　鶴牧　長嶋　廣瀨　川越　高遠
福知山　前橋　龍岡　福山　松代　作州勝山
上田　大野　今治　飯山　下妻　杵築　足守
宇和嶋　柳本　駿州　丸龜　柳河　勢州龜山
松本　櫛良　水口　泉　小幡　高槻　新發田
廣嶋新田　龜田　田原　大聖寺　苗木　尼崎

津　久居　大垣　山上　新宮　西端　大田喜
舘山　郡上　完戸　高嶋　田沼　玄蕃頭　綾部
西尾隱岐守　黒川　栢原　田安　淺尾　大溝
宇土　大洲　唐津　昌平學校　日出　三根山
持木　阿州　豐岡　長瀞　鳥羽　高田　沼田
丹州龜山　佐倉　久留里　小松　彦根　岡田
喜連川　鴨方　飯野　小城　小倉新田　椎谷
敦賀　薦野　秋月　田原本　麻田　秋田新田
山家　一橋　津和野　舉母　林田　大垣新田

岩槻　中津　八戸　蓮池　福江　志筑　新見
福本　佐野　下舘　水戸　濱田　嶋原　高岡
豫州吉田　牛久　母里　岸和田　佐伯　尾州
荻野山中　三日市　笠間　高崎　麻生　臼杵
今尾　岡　雲州　飫肥　紀州　中村　伊勢崎
人吉　安中　三州吉田　久留米　伯太　丹南
村岡　太田備中守　櫻井　長尾　岩村　越前
豫州松山　土浦　鯖江　三草　三上　小見川
羽後松山　山崎　舘林　多度津　堀江　一ノ宮

園部　烏山　結城　峰山　壬生　高鍋　吉井
鹿嶋　三春　須坂　平戸新田　絲魚川　出石
三田

否トスル者十三人

丸岡　生實　高取　宮津　高富　富山　岡部
安志　七日市　紀州田邊　高松　新庄　柳生

可否相雜ル者六人

西條　笹山　足利　小野　小田原　重原

依テ可ト決シ候事

第十號切腹禁止可然ノ議

議政官史官　小野清五郎

本邦士ヲ刑スルニ切腹ノ科アリ又其人ノ罪曖昧ニシテ未ダ定ラザル者多クハ自ラ切腹シテ其罪ヲ償フ是レ本邦武門ノ士喋々稱揚スル所ナリ然レドモ切腹ノ事西洋各國ニハ絶テ無キ所ト承及候且命ヲ奉ジ切腹スル者ハ猶可ナリ命ヲ待タズシテ切腹スル者ニ至テハ不經ノ甚敷ト云ベシ如何トナレハ其又果シテ無罪ナレ

バ到底辨解已レノ冤ヲ白スベシ何ゾ切腹ノ擧ニ至ランヤ又其人果シテ罪アラバ則國ニ刑憲アリ甘ンジテ罪ニ服シ朝裁ヲ待ツベシ何ゾ切腹ノ擧ニ至ランヤ是レ國家ノ刑憲ヲ蔑シ罪ヲ償ハントシテ却テ罪ヲ添ルノ道理ナリ且夫此等ノ士多クハ氣概アリテ廉恥ヲ知レル者ナリ一旦自悔ヒ奮發激勵ゼバ國家ニ裨益アルハ勿論ナリ然ルニ一二疑似ノ罪ニヨリ殞命ニ至ラシムルハ人ヲシテ自改ノ道ヲ塞ガシメ國家

育材ノ御趣意ニモ相戻リ候儀ト奉存候今般
御一新ノ際此等ノ事御禁止相成候方可然奉存
候

右評論鈔出

雨森謙三郎

命ヲ待タズシテ切腹スル者ハ軽躁ニ似タレ𪜈
其志慷慨ニ出テ、靦顔恥ヲ知ラサル者ノ比ニ
非ズ強テ之ヲ制セントス𪜈憤發不畏死者決シ
テ顧忌スル所無クシテ恐ラクハ柔懦ノ徒之ヲ

以テ口實トシ生ヲ貪ルノ地トナサン士氣衰颯
ノ日ニ當テ鼓舞作興ニ暇アラザラントス何ゾ
塗ニ塗ヲ附ルニ忍ビン切腹決シテ禁ス可ラズ

大略同論ノ者

高橋和多留　坪和錦藏　田代環　小林助右衛門
生田平格　櫻庭太次馬　杉浦誠　稲津濟

士ニ割腹ヲ命ズルハ斬ニ處セントスレバ情ニ
於テ憐ムベク死ヲ宥メントスレバ法ニ於テ赦

ス可ラズ是ヲ以テ斟酌シ戮辱セズシテ自裁セシムルナリ不經ト云フベカラズ又刑ヲ待タズシテ自刎スルハ稱スベキニアリ大法ヲ犯スヲ知リ自ラ刑シテ其罪ニ服ス一ナリ義ノ以テ死スベキヲ知リ苟モ免レザル二ナリ此刑決シテ廢ス可ラズ

大略同論ノ者

依田右衛門郎　成瀬左門

岡本治兵衛

此議案并ニ帶刀ヲ廢スル等ノ議ハ守内獨有之御國體ヲ失ヒ海外卓越ノ風ヲ壞ルナリ

佐々鋏左門

切腹ノ科アルハ士ヲ重ジ庶人ヲ賤ズルノ所以ナリ禁ズ可ラザル論ヲ待タズ如シ君父ノ爲メニスルニ非ズシテ濫ニ罪ヲ犯シ切腹シテ其罪ヲ償フハ禁スベキ如クナレ𪜈其罪ヲ知テ悔悟スル也是本邦士氣ノ然ル處ニシテ敢テ刑憲ヲ蔑スルニアラズ

刑不上於大夫ハ聖人ノ制有罪賜死不使至戮辱
忠厚ノ意至矣士大夫因事決死豈嚴禁ヲ以テ止
ムベケンヤ世ノ下レルニ従テ廉恥ノ心消耗シ
名ハ士大夫ト雖モ心ハ商賈ナリ此頽俗ヲ勵マ
サズ陵遲年ヲ積マバ屠腹セヨト令ストモ従フ
者ナカラン況ヤ禁之乎切腹者アルハ國家ノ洪
福ナリ

園田　保

梶又左衛門

官裁ヲ待タズシテ死ニ臨ムハ不經ニ似タレ氏
上ヲ蔑スルニ非ズ固有ノ廉恥肺肝ニ感銘シテ
終ニ屠腹ノ舉ニ至ルナリ是本邦名義名分ヲ以
テ建タル國風ナリ併官裁ヲ不待自己ニ屠腹ス
ルハ禁止可然ナレ氏士ヲ刑スル切腹ノ法ハ従
前ノ通リ御居置無之テハ士庶人ノ別混淆セン

渡邊清右門

命ヲ待タズシテ切腹スルハ所謂狼狽忙遽ヨリ
起ルナラン然レハ假令是ヲ禁ズル氏狼狽忙遽

ヲ洒掃スルノ道難シ且我國自ラ國律アリ何ゾ
西洋各國ノ法ヲ論ズルニ及バンヤ

服部清三郎

切腹禁止好生ノ德ニ叶ヒ尤ニ聞ユレモ廉恥ヲ
養フノ道ナレバ矢張其儘差置レ士大夫恥ヲ不
知者游蕩ニシテ性命ヲ害スルヲ禁ズベシ

堀江覺右衛門

本邦ノ士林已ムヲ得ザル所ヨリ自殺シテ其志
ヲナスナリ洋教自ラ刄ヲ身體ニ推スヲ禁ズル
ト同日ノ論ニ非ズ之ヲ禁ゼバ士林ヲシテ其志
ヲナサシムルニ至テ大ニ不可ナラン

福井大助

切腹ノ刑武門ノ甘ズル所至當ノ刑ナリ又自裁
モ止ムヿヲ得ザルニ出ツ故ニ禁止然ル可ラズ

原株之助

此規則相立候テモ士ノ禁戒ヲ犯スノ弊アルハ
必然ナリ亦私ニ咽喉ヲ搗ク等ノ弊アルベシ切
腹ノミヲ禁ゼバ却テ士道ヲ失フノ理ナリ

其罪曖昧ナル者切腹スルハ實ニ可惜ノ至ナリ

二木縫殿助

此等ハ禁ジテ可ナルベシ若シ其人罪アリ朝裁ヲ乞フニ至テハ權道ヲ以テ之ヲ處シテ可ナリ苟モ其罪死ニ當ラバ自刄スルト人手ヲ借ルト何ゾ異ナランヤ若シ概シテ之ヲ禁ジ別ニ典刑ヲ立ルニ至テハ其適從スル所ヲ知ラズ

有竹裕

命ヲ待タズシテ切腹スルハ論ヲ待タズシテ不可ナリ此等ハ多ク狂病ニ屬セリ禁令モ守ラザルヲイカン如カズ教育ヲ敦フシ病因ヲ斷ンニハ士大夫ニ切腹ノ刑アルハ平民ト品位ヲ異ニスル所以ナリ禁ズ可ラズ

國府寺源衛

切腹ノ事禁之モ行ハレザル所アラン從來本邦ハ武ヲ先ニシ義ヲ重ズル國ナリ故ニ或ハ徒ラニ繩ニカヽリ辱ヲ受ルヲ恥テ自殺シ或ハ大節ヲ抱キ死ヲ矢ツテ居ル者敵手ニ捕ハレ義ヲ守

リテ自殺スル等アリ禁之ハ折武不義ヲ教ユルナリ

齋藤幸之進

大略同論

生田四郎兵衛

切腹ハ　皇國厚篤ノ美俗ナリ何ゾ之ヲ廢セン命ヲ待ズシテ自殺スルハ厳禁スベキナレ𪜈一概ニ禁ゼバ氣概ヲ傷ラン右ノ弊ヲ生ゼザル道アラバ可ナリ

武士ハ農工商ノ上ニ立依テコレト同刑ニ行フハ本意ナシ異國ヲ傚フ可ラズ切腹ノ刑廢ス可ラズ軍令ニ背クハ評外ナリ命ヲ待タズ私ニ切腹スルハ厳禁スベシ

野々村倫左門

切腹ノ事西洋各國ニ絶無ト云𪜈必シモ彼ヲ優レリトス可ラズ且切腹ヲ以テ國法トナスハ議案ノ如ク廢スベシ然レ𪜈士知恥テ自盡スルヲ

中金稱平

禁ズレバ義氣ヲ養フ道ニ非ズ不待命自盡スルモ不經ニ非ズ待　朝裁ハ道ノ順ナリ自盡ハ道ノ權ナリ

安嶋解三

義概ヨリ出テ生ヲ捨ルハ一大難事ナリ士トシテ義概ナキハ士ニ非ズ國家育材ノ意アラバ天下ノ義概ヲ愛養スベシ故ニ之ヲ禁ズ可ラズ

中里行藏

大略同論

切腹ハ刑法ノ科ニアラズ事柄ニヨリ官ヨリ士道ヲ憐ンデ寛典ニ處スルナルベシ自ラ切腹スルハ言路洞開セザルヨリ激發スルナルベシ之ヲ禁ズモ徒法ニシテ行ハル可ラズ

水野立三郎

切腹ハ義勇潔白實ニ賞スベシ之ヲ禁ズレバ國體ノ確法ヲ失ハン

富永主馬

川西六三

曖昧過罪ノ切腹ヲ除カントナラバ自首律ヲ建設シ忠臣義士ノ節操ヲ慕ハスル切腹ノ刑ハ依然掲ゲ置ベシ

秋元與助

切腹廢止ハ何ノ謂ゾヤ西洋各國ハ其國土ノ制度アリ我大東ノ拘ルベキ所ニ非ズ又云議案中命ヲ待スシテ自ラ切腹云々ハ罪ヲ知テ自裁スルヲ知ラザルニ似タリ又云其人果シテ罪アラバ云々ハ自刄スル能ハズ　朝裁ヲ待ヲロ實ト

シ萬一ノ生活ヲ僥倖スルノ路ヲ開クナリ又云一二疑似ノ罪云々此言惻怛忍ビ難キノ情ニ出テサモアルベキニ似タレ𪜈義ヲ以テ愛ニ克ノ權ナクシテハ士道立可ラズ

瀧澤省吾

切腹ハ大惡及ビ汚穢貪婪ノ罪ヲ犯スニ加ヘズ所謂情ニ本ヅキ施設スル所ノ刑典ニシテ氣節ヲ磨勵スルノ意モ亦其中ニ寓ス政刑ハ風土人情ニ隨テ異ナル者ナレバ今各國ノ制ヲ擧テ我

刑典ヲ禁セントスルハ不可ナリ

那須金右衛門

切腹禁止ハ理アルニ似タレドモ西洋各國トハ風教ヲ異ニシ第一士氣ノ强弱ニモ拘リ候儀ニテ禁ズ可ラズ

鈴木義太郎

上ナル者下ヲ待スルニ禮ヲ以テスレバ面折廷爭シ命ヲ待タズシテ自裁ノ事ナシ聖學ヲ講明スレバ輕シク國憲ヲ犯シ割腹ノ事ナケシ故ニ學ヲ建師ヲ立以テ其根ニ培セバ禁ゼズシテ切腹ノ事ナシ

立花次郎左衛門

命ヲ奉ジ切腹スルハ固ヨリ至當ナリ其非ヲ悔テ切腹シ己ノ罪ヲ償フハ稱譽シテ可ナリ命ヲ待タザル者ハ不經ニ似タリト雖モ死刑ヲ犯シ既ニ悔悟スルモ罪狀ヲ自首シ命ヲ待チ惡面目ヲ衆人ニ施ス又何ゾ恥ザランヤ且或ハ亂心等ニテ割腹スルガ如キ之ヲ如何セン强テ禁ゼン

トセバ世上用フル所大小ノ利及ヲ悉ク廢セザレバ禁ジ難シ禁ジ難キヲ知テ之ヲ施ス又何ノ益アラン

此外猶評論アリ次ノ巻ニ出ス

官版御用

御彫刻所 神田旅籠町一丁目 竹口瀧三郎

御書物所 本町四丁目 上州屋惣七